舞踊作品の鑑賞技能の実態的把握

島内敏子・北野啓子・石田五月

目　的

現示的形式としての舞踊芸術では舞踊運動を核とする媒体を通して，作者の表現意図が象徴的に表現されるところに特徴がある。

舞踊鑑賞の場ではこの作者の象徴的表現に対し鑑賞者は自らの固有の受け止めを行い，各個による多様な受容の様相が展開されるが，一方作品の受容の仕方の共通性，また作者の意図への接近に深浅の傾向性のあることも経験上知られている。

舞踊学習の場では，「作る」・「踊る」活動とともにこの「鑑賞」活動が重要な柱であり，これが有効に展開される時，学習者の舞踊の技能が総合的に高められていくと考えられる。

本研究では，本学学生を対象とし，テーマ性を有する舞踊作品の運動による象徴的表現がいかに受け止められ，鑑賞されるのか，作品鑑賞の実態を検討し，作品に対する鑑賞構造の把握を行い，鑑賞指導，舞踊学習指導上の基礎資料を得ることを目的とする。

研究方法

1〕一定の社会的評価を得た舞踊作品（「全日本高校・大学ダンスフェスティバル――神戸」における受賞作品）の中から，テーマ性を比較的強く有し，互いに作風の異なると見られる4作品を選定する。（作品①「実験・研究狂騒曲」，作品②「Without …――共に生きる――」，作品③「母の胎内に宿ったけれども生まれてはこなかった私」，作品④「共産黨宣言」）。

2〕4作品の収録映像を対象者に鑑賞させ，各作品に対する感想・印象の自由記述を含む質問紙法調査を行った。調査項目は，1）ダンス活動に対する好嫌度　2）各作品に対する好嫌度，評価3）印象に残る良い部分　4）各作品に対し当てはまる感情語　5）作り，踊ってみたい作品　6）各作品のテーマの伝達（自由記述）。対象者は，舞踊初心者として日本女子体育大学1年生145名，経験者として同4年生芸術スポーツコース19名，計164名である。期日は，1995年1月10日（火）。

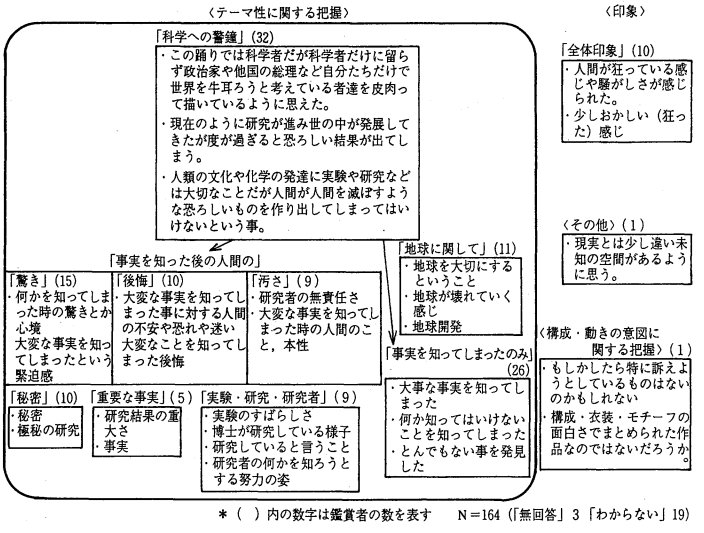
3〕鑑賞者から得た自由記述は，内容面から検討し，KJ 法を用いて分類し構造化した。

結果と考察

各作品のテーマの伝達に関する鑑賞者の自由記述の分類（図1参照）では，1．表現テーマそのものの把握を示す内容　2．作品の全体的な印象を主として形容詞，形容動詞を用いて表現している内容　3．構成や動きの意図について言及した内容，に分けることができた。このうち，最も多かった1の「テーマに関する把握の様相」を1作品ずつ検討し，作品の鑑賞受容のしかたに，次の5タイプを得た。

（1）「人類の文化や科学の発達に，実験や研究などは大切なことだが，人間が人間を滅ぼすような恐ろしいものを作り出してしまってはいけない「（作品①）のように作者の主張をトータルに把握しているもの。　（2）「事実を知ってしまったこと」そして重大な事実を知った後の「驚き」「後悔」「汚さ」を伝えている（作品①）とするように，テーマの根幹に触れる内容を直観的に短い言語表現で把握しているもの。　（3）「秘密」「実験・研究・研究者」「地球」（作品①）のように作品の全体表現内容の一部や動きの一部を受容していることを示す記述。　（4）作者の意図するテーマとは異なる内容に作品のテーマを見ているもの。　（5）作者の意図からさらに先を読みとり，一歩深めた発展的な鑑賞をしているもの。

以上のにように，各作品に対する鑑賞者固有の受容には，学生全体では，一定の特徴をもつタイプ（『層』）がみられ，作者の表現意図への接近に〈近――遠〉の幅のある鑑賞構造をみることができたと考えられる。



＊（　）内の数字は鑑賞者の数を表す　N＝164（「無回答」3「わからない」19）

図1　作品①『実験・研究狂騒曲』の鑑賞構造